

平清盛の宿願 巖島信仰

「天下の権」が大きく移り変わるとき、歴史は勝者を「賢君」とし、敗者は「暗君」と貶（おとし）めるのが常です。時代には節目と呼ばれる時にいろいろな出来事が起こり、時代が変わる時には、大きな変革がありました。そこに至るには必ず要因があるわけで、この要因を形成するまでには時の流れという長い年月の積み重ねがあります。この「大きな時の流れの積み重ね」・・・それが歴史と言えます。



平清盛がどんな時代を生きてきたのか、その時代背景をまずは簡単に押さえつつ、清盛の経営とその事蹟を切り口にして、宿願 巖島信仰に至る清盛の胸中から我々が学ぶことがないのかを探ってみたい。

1. 平清盛を悪人と誰もが思う原因とは

平家物語 巻第一

祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。
奢れる人も久しからず。只春の夜の夢の如し。猛き者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

遠く異朝を問ふらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、是等は皆、旧主先皇の政にも従はず、楽みを極め、諫をも思入れず、天下の乱れむ事を悟ずして、民間の憂うる所を知らざりしかば、久しからずして、亡じにし者ども也。

近く本朝を窺ふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、此等は奢れる心も猛き事も、皆とりどりにこそありしかども、
間近くは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝へうけ給こそ、心も詞も及ばれぬ。

其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子、高見の王、無官無位にして失せ給ひぬ。

其御子、高望の王の時、始て平の姓を賜って、上総介になり給ひしより以来、忽に王氏を出て人臣に連る。其子鎮守府將軍義茂、後には国香と改む。国香より正盛にいたる迄、六代は、諸國の受領たりしか共、殿上の仙藉をば未許されず。

この物語は、琵琶法師によって、日本全国に伝えられ、平清盛は、日本史上最悪の存在になってしまったというわけです。

2. 変革期を迎えた貴族の摂関政治

「藤原氏」は、中臣鎌足が大化の改新の功により天智天皇に賜った「藤原」の姓が、子の藤原不比等の代に認められたのが、始まりとされます。

奈良時代に、南家・北家・式家・京家の四家に分かれた藤原氏は、平安時代には、天皇よりも偉い存在でした。

藤原四家の北家と呼ばれる一族が、代々、摂政、関白、内覧などを務めて、最高権力者として君臨したのを「藤原摂関家」といいます。

天皇が幼い時は摂政、元服したのちは関白として、母方の祖父が天皇の権限に代わって政務を司るのが摂関政治ですから、入内した藤原摂関家の娘が皇子を産まなければ、摂関政治は成立しません。

3. 白河天皇の院政のはじまり

治暦四年（1068）兄の後冷泉天皇の崩御によって、藤原摂関家と無縁の後三条天皇が即位します。

中央貴族や寺社が開墾して新田としたものは、土地の私有が許され、租税が免除される「荘園」は、領地を持つ地方の豪族が、新田を寄進し名義だけ貴族にすれば、租税を免除されていました。

このため、朝廷の財政は、税収の減少により破綻していました。

この摂関政治という政治システムでは、天皇は永遠に藤原一族には頭が上がりません。

さらに、この時代の天皇は、貧乏でした。その理由は、全国の土地の多くが、税を免除された摂関家の荘園となっていたために、税金が入らないシステムになっていたからです。

白河天皇の逆襲が始まります。

応徳三年（1086）、8歳のわが子を堀河天皇に即位させ、自らは、上皇となります。そうして、「藤原摂関家の影響力の及ばない」立場を確保した上で、国政に関与するという訳です。

上皇は「院」と呼ばれたので「院政」といいます。

白河上皇は、国司の長官（つまり受領）の任免権を取り戻し、「武士」を受領に任命するという策を取ります。これが功を奏し、荘園からの税収入のシステムを、武力をもって藤原一族から断ち切ることで、朝廷の財政再建に成功したのです。

一方、瀬戸内海航路というのは、輸送の大動脈として、繁栄をみるに伴い、海運を生業とする武力を持った「海賊」が横行し、朝廷を悩ませます。

そこで瀬戸内の受領に武士である平忠盛が起用されます。

忠盛は、これまでの諸国の受領を歴任した実績から、西海（瀬戸内）の海賊討伐の命を受け、反抗したものだけを討ち、帰順した海賊は配下に置き、家人や配下の郎党を増やしつつ、各地の豪族たちを勢力下に組み込んでいきます。

そして、瀬戸内海沿岸のほぼ全域を支配するまでの勢力基盤を築き、日宋貿易の権益を取り込み、莫大な富を蓄え、忠盛の武力と財力は、子の清盛に引き継がれていくことになるのです。

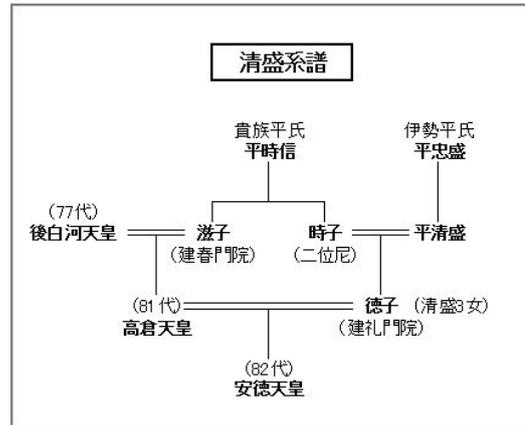
4. 平清盛の出生・幼少時代

平清盛（1118～1181）は、享年64歳。平安時代末期の武将・公卿・政治家・そして父忠盛のすご

い威力がベースにあって、それを乗り越えるパワーを持つ、先見性を備えた経営者といえます。

清盛の出生については、白河院晩年の寵人であった祇園女御の妹が生母といわれています。

妹は、白河院の皇胤を宿したまま、伊勢平氏の棟梁である平忠盛に嫁し永久六年（1118年）正月十八日に清盛を生み、清盛三歳の時に没しましたので、姉の祇園女御が、清盛を猶子として、白河法王の館で、法皇の子として育てています。



「平家物語」は、延慶二年（1309）以前には成立していません。その第二巻 三. 西光被斬（さいこうがきられ）に、鹿ヶ谷事件で捕まった西光が清盛に向って、ののしったことが語られています。

「そもそもごへんは、ご刑部卿忠盛のちやくしにておはせしが、じふしごまではしゆつしもしたまはず。こなかのみかどのとうぢうなごんかせいのきやうのへんにたちいりたまひしをば、きやうわらんべはれいのたかへいだとこそいひしか。」

「そもそも貴殿は故刑部卿忠盛の嫡子ではございますが、十四、五歳までは朝廷に出仕されることもなく、故中御門藤中納言家成卿のそばに出入りされておったのを、京童は例の『高平太』と、噂をしていたではないか。」

父忠盛の後妻で頼盛の母宗子つまり『池の尼公の指示で、清盛少年は、警護などを期待して家成の邸宅にふかすみ（墨黒）の馬に乗り頻繁に出入りしていた頃、京童に「高平太」と指を指されていた』とあります。「高平太」とは、高足駄（高下駄のこと）の平氏の太郎（長男）という意味のようです。（「高平太」についての参考文献：人物叢書「平清盛」五味文彦 吉川弘文館）

5. 平清盛の栄華への過程

久安二年(1146)二月二日、平清盛は二十九歳で正四位下に叙し、7月11日、安芸守に任ぜられ、厳島神社は日宋貿易航路の守護神でもあり深く信仰し、厳島神社参詣を「宿願」とします。

（宿願・・・かねてからの願望）

父忠盛は仁平三年（1153）四月、病により成仏得道（仏道を修行して煩惱を断ち、無上の悟りを開くこと）のため出家。二日後の十五日に黄泉国（死者の世界）に旅立つ。五十八歳。

永暦元年(1160)八月一日、清盛43歳の時、武士として初めて正三位の公卿に列せられると、厳島神社への参詣という「宿願」を、およそ十五年も経ってから初めて果たすのです。

その後は、広島県史では、二十年間に十回の参詣をするほど熱烈な信仰でした。

平安末期、農業や産業が発達し、国全体の経済力が上向いてきます。絹や米などを用いた物々交換では、流通に限界が生じて、実質的な経済力に比べて、貨幣が不足しているデフレ状態になっていた状況の中、清盛は、世界に目を向け、日宋貿易で得られた宋銭で貨幣経済を創始します。

「貿易と通貨」という二つの仕組みで、新しい経済力をもたらそうという野望を抱き、厳島大明神に祈願し、成就を得るため、厳島神社参詣という宿願を決意したのではないか。

応保元年（1161）には、日本ではじめての人工港・博多の「袖の湊」を建設し、さらに、長寛元年（1163）には、大輪田泊の修築の工事を再開しています。

畿内へと通じる瀬戸内海航路の安全な航海を目指すという、清盛の強い思いは、「扇で夕日を招き返し」て、開削を1日で終わらせたという「音戸の瀬戸開削伝説」に繋がっていると考えられます。伝説では、完成は、永万元年（1165）とも、仁安二年（1167）ともされているようです。

嘉応二年（1170）大輪田泊に初めて宋の船が停泊します。

この間、平氏一門は隆盛を極め、平氏は全国に500余りの荘園を保有。清盛は、日宋貿易を推進・拡大し、莫大な財貨を手に入れます。

この頃、清盛の妻時子と妹の後白河法皇の後建春門院滋子の兄の平時思は「平氏にあらざれば人にあらざ」と失言しています。

鹿ヶ谷事件から二年後の治承三年（1179年）十一月、清盛は御白河法皇への度重なる不満が破裂して、「治承三年の政変」に打って出、法皇を幽閉し、院政を停止、京都六波羅に平氏政権を確立します。

6. 清盛の人物像

鎌倉中期の説話集「十訓抄」第7の27「不専思慮事（しりよをもつばらにすべきこと）」では、「清盛のやさしさ」について触れています。

『冬の寒い時には、身辺で奉仕する幼い従者を、自分の衣の裾の方に寝かせ、彼らが朝寝坊をしていたら、そっと床から抜け出して存分に寝かせた』人の心を感ぜしむとはこれなり。とあります。

7. 平清盛のもたらした都の文化

①「平家納経」

永暦元年（1160）宿願であった厳島参詣を果たした清盛は、長寛二年（1164）九月、一門の繁栄を祈願して、三十二巻の装飾経を、そして三年後、願主として、清盛自筆の願文を厳島神社に奉納します。それが今に伝わる国宝の「平家納経」三十三巻です。

平家納経の願文には、発願の動機が描き出されています。

（読み下し文）

ていし きよもり うやまって もうす。 それ おもんみるに、ひんぱん かぜ かんばしくし、・・・云々。

続いて、願文（884頁）に「・・・「菩提心」を願う者は、此の社に祈請せば、必ず発得することあり」とあります。

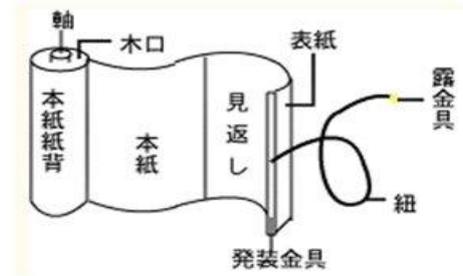
弟子清盛敬って白す、夫れ以みるに蘋繁風芳しく、自ら芬陀利華の露に混じ、潢汚水潔くして、遂に薩婆若海の波に帰す。和光同塵、其れ然らざらんや。伏して惟みるに安藝國伊都岐島大明神は、名は常篇に載せ、礼は恒典に存す。一区孤州の「山+截」（せつ）「山+辟」（がっ）たるに拠り。

厳島大明神に、悟りを求めようとする心「菩提心」を得るようお願いすれば、必ずかなえてもらえるということだと思えます。

清盛が「平家納経」を厳島神社に納めた理由は、自身は分相應に、また一門は必ず浄土に行けるようにと、厳島大明神にかなえてもらうためであったのです。

②「装飾経巻（そうしょくきょうかん）」

お経の巻物の表紙の裏を「見返し」といい、絵が書いてある経巻があります。お経の意味を、絵で表現できる世界を描いたもので、「**経意絵**」と呼ばれます。



「堤婆品(本紙)」

「堤婆品(見返し)」



写経の願主は、料紙(物を書くための紙)に色紙や染紙を用いて金銀箔をちらし、通常は、墨で書きます。中には、「堤婆品(だいばほん)」のような群青(藍がかった青)・緑青(青緑色)・銀泥(銀粉をにかわで溶いた顔料)・金泥(金粉をにかわで溶いた顔料)で5紙に経文を書いたものがあります。これは、一筆、一筆、筆を換えながらの、難儀な作業で、入魂の写経でもあります。(参考:「平家納経 平清盛とその成立」小松茂美)

(参考: <http://www1.odn.ne.jp/~vivace/itsukushima.HP/heikenokyo.htm>)

③「清盛がもたらした舞楽や管絃祭」

平清盛は、京の雅な文化の一つ、四天王寺(大坂)に伝わる「舞楽」を厳島にもたらしました。祭礼の時に舞楽を奉納することが今に伝承されています。

(『広島県文化財ニュース 195号』所収「厳島神社の絵馬」)。

承安三年(1173)の銘がある舞楽面「抜頭(ばとう)」(重要文化財・行明作)があり、清盛はじめ平家一門が参詣に訪れた時には、厳島神社で舞楽が演じられていたようです。

厳島神社最大の祭りともいえる「管絃祭」も、清盛が当時都で盛んに行われていた管絃の遊びを、厳島神社に移し、神事としたものと言われているようです。

厳島神社創建当初から、神を崇める厳島には人は住んではならないことになっていました。

そのために、神事・祭祀を行うときは、地方(対岸の地御前)から、神官・供僧は舟でその都度渡海していたものと思われます。

当時の管絃祭は、今とは逆の居住地の地御前神社前を出発し、大型船の唐船で管絃を奏でながら厳島に渡っていたのではないか。

また、7・8月の台風を避け、大型船で水が深いため、水深の確保のために、大潮の旧暦6月17日を選んだのではないかと考えています。